

## 論文審査の結果の要旨

氏名 田森雅一

田森雅一氏の論文、『近代インドにおける古典音楽の社会的世界とその変容 — “音楽すること”の人類学的研究』の目的は、インド古典音楽の、弦楽器、サロードの演奏家集団である「ガラーナー」を対象に、その組織原理と集団概念の歴史的变化に焦点を当て、近代インド社会において“音楽すること”によって生きる人々の、日常的な実践と社会空間を解析することである。

本論文のデータは、田森氏の1987年に始まる、長期にわたるインド音楽の、徒弟的学習体験の中で収集されたものであるが、その間、1997年12月から1999年1月にかけて、集中的なインタビュー調査が行われ、演奏家個々人の資料も得られた。

本論文は、序論に始まり、3部に分かれた14章が続き、結論で終わる。序論では、民族音楽学者のアラン・メリアムの批判的継承と社会学者のアンソニー・ギデンズに依拠しながら「音楽の再生産モデル」を提示する。第1部、「ガラーナーとは何か」では、ガラーナーと呼ばれる音楽家集団が、北インドにおいて歴史的にどのように発生し、ムガル帝国の中でどのように発展し、帝国の弱体化とイギリスの植民地化の中を、どのように生き延びながら変容したかを描く。第2部、「近代におけるインド音楽の社会空間」は、第1部の歴史的背景と、第3部の事例研究とを結びつける役割を果たしている。そこでは、それまでガラーナーによって宮廷音楽として継承されてきたものが、英領インドの統治下、独立運動の中で、いかにして国民音楽に生まれかわることとなったかを、音楽の理論化、音楽家たちの全国的な組織化、学校やレコード、マスメディアを通しての教育と普及、といったことがらを検討することで明らかにする。第3部の「事例研究：サロード・ガラーナーをめぐって」では、今日まで続く4つの主要なガラーナーの系譜関係を婚姻関係と師弟関係の錯綜の中に解明し、ガラーナーメンバー個々人の語りにもみられる微細な意味を解読することで、彼ら音楽家たちのアイデンティティがいかに形成されるか、その音楽がいかに再生産されるかを論証する。結論では、現在のインドにおいて、“音楽すること”とはいかなる社会的実践であり、創造であるかを、その将来をも見据えて、説いている。

私たちの生活の中で、音楽が他の何と比べても、非常に高い価値を持つことは、誰もがうなずくことであろう。しかし、文化人類学において、「民族音楽」としてではなく、「音楽」としての社会的な意味と活動とを正面から見据えた研究は、比較的、少なかった。本論文は、そうした中で、これまでの文化人類学の音楽研究の遅れを取り戻し、力強い出発を促すことに寄与する、堅固でかつ刺激的な労作である。本論文の学問的な貢献を大きく二点に絞れば、第一に、インドにおける長期にわたる参与観察と多くのキーインフォーマントへのインタビュー調査に基づく、そして著者自身がサロードの演奏者であることで初めて可能となる演奏技法の細部にまでわたる詳細な記述を含む、国際的な研究水準を抜く民族誌であることである。具体的には、南アジアを代表するインド古典音楽の集

団であるガラーナーを対象に、彼ら個人や集団の意識が形成される土台となった社会関係の構築とその変化、そして彼らが、いかに語り、行為することによって日常実践を遂行しているのか、をこと細かに記述し、解説し、その実態を私たちの知識として、共有出来るものとしたことである。第二に、「音楽と社会」をめぐる研究に大いに寄与する理論的成果であることである。それは、“音楽すること”にまつわる音楽家の日常実践と社会空間を、音楽形成の歴史、共同体における社会関係、音楽家の主体的行為という異なる水準の相互作用として捉えなおすために、3つの時間性、すなわち(1)制度の再生産、(2)人間の再生産、(3)相互行為の再生産、という分析的視点を導入したことによる。このような時間性の導入により、構造の現れとしての制度が維持ないし変化するマクロな歴史的過程、共同体における学習過程と社会関係が結び合う過程、そして人々の相互行為が織りなすミクロな実践的過程という3つのレベルでのガラーナーの検討が可能になり、そのことが“音楽すること”の人類学的研究および「音楽と社会」をめぐる理論的研究を大きく前進させた。

むろん、本論文にも、問題点がないとは言えない。ことにいくつかの理論的援用が、かえって著者のデータ自体が発揮したであろう豊かさを減じているのではないか、という恨みが残った。しかしながら、本論文の持つ価値は十分に高いものがあり、本論文は文化人類学の研究に対して重要な貢献をなしていると判断された。したがって、本審査委員会は、全員一致で、本論文は博士(学術)の学位を授与するにふさわしい、と判定した。